

わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった？

兵庫県立津名高等学校同窓生 岡内 とどむ

※ 本記事は研究書の少ない時期に同窓生に向けて書かれたため、出版物からの引用を含んでいます。

# 特別寄稿

【序章】  
大澤壽人、  
再会のきつかけは  
「おのころ会」

i ひとくち勉強  
我々第一六期生有志は年末に毎年同窓会「おのころ会」を開催している。昨年で一七回目。会場は大阪に始まり、三ノ宮・神戸・そして数年前から舞子駅前へと淡路島にすり寄つて来た。一ひとつの加齢現象か(笑)

参加者も四〇名程度になり三年前から柳圭吉先生・徳田泰治先生にも出席いただいている。ピルの七階から淡路島が真正面に見えるレストランを見つけ、ここがお決まりの会場。ワイワイガヤガヤ二時間程。お開きはいつも同じ、全員で母校と淡路島に向かい大声の校歌斉唱で締め括る。

三年前、折角の機会だからこの会で、淡路島の事・母校の事・母校の事のひとつ勉強をやるうとの声があがった。翌年の第一回は長尾秀美君が調べた「校章の由来について」。第二回の当番になった小生は「校歌

# わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった？

第一六期生 岡内とどむ

でない等主張しこれはクリアーした。つぎの難題は公募から特命か特命なら誰かを選ぶか？いづれも意見が種々出た議論を尽したのであるが結局作詞は竹中郁に決まった。

④幸運 母校に竹中と昵懇の人物  
半世紀たった今校歌制定過程を鳥瞰すると、母校にとつて幸運だったのは竹中という著名な詩人と師弟・朋友・詩友の関係にあった。偶田泰弘先生の存在である。小川元延先生に伺ったところでは偶田先生は「大阪にいるときから昵懇なので竹中郁なら頼めるよ」と関係者に言つてあつた由である。

について」を選んだ。(昨年第三回は「淡路島の芭蕉句碑について」)

ii 大澤壽人？  
さて「校歌について」では作詞者と作曲者についての情報を提供することに、母校のホームページから作詞↓竹中郁 作曲↓大澤壽人の情報を得た。竹中郁は優れた近代詩人であるとの知識はあつた。それでは、大澤壽人(おおさわひさと)とはどんな人なのか？竹中郁とバランスがとれるレベルの人なのだろうか？皆目判らない。そこで、インターネット検索。すると眼前に大澤壽人ワールドが広がつて来た。

【第一楽章】  
大澤壽人・没後半世紀  
忘れられていた  
稀代の天才作曲家

ネット検索他で種々のデータを集める傍ら、大澤作品のCDがリリースされていることを知り早速買い求めた。まずピアノ協奏曲第三番を聴いたが素晴らしい曲だ。第二次世界大戦前に日本人によりこれほどの曲が作曲されていたとは、しかもこれほどの曲がほぼ七〇年これほど演奏されてこなかったことに二重の驚きを禁じ得ない。

\* 日本作曲家選輯・大澤壽人  
ロシア・フィルハーモニー管弦楽団(平成一五年三月モスクワにて録音)

又竹中に作曲者の相談をすれば大澤の名が出る事は頷ける。(竹中・大澤はほぼ同じ時期の神戸生まれ。岡内・深江文化村という共通点も多く、お互いに芸術家として尊敬しあうなかであり共同制作は三二曲にも及んでいる)

まさに偶田↓竹中↓大澤のラインは母校にとつて思いがけない幸運の糸であつた。

⑤校歌秘話 新池・著倉山・黒田池・静御前墓・案内しつつ心通う会話  
六〇年のあゆみ「校歌秘話」に志筑を訪れた竹中を案内しながら交わした会話が綴られてゐる。ほのぼのとして心温まる。竹中は屈託なく笑いながら言つた「今日の会話を大切に、すばらしい校歌をつくるよ」と。そして偶田先生はこう結んでいる「この校歌がまさに交響詩」として歌い続けられる限り、津名高は常

i 音楽環境  
大澤は明治三九年神戸市の裕福な家庭に生まれた(父は神戸製鋼創設に参画した実業家、母はクリスチャン)。幼少時母親からピアノの手ほどきを受け、後に「深江文化村」の亡命ロシア人ピアノリスト(ロシアの音楽院の教授であつたアレクサンドル・ルーチン)等にピアノの指導を受けた(いわゆる「阪神間モダンズム」の洗礼を受けた)。

ii 留学時代  
昭和五年・二四歳(昭和一年・三〇歳(ポストン四年パリ二年)  
関学卒業後ポストン大学スミス教授に招かれ世界の音楽のメツカのひとつボストンへ。正式に作曲と音楽理論を勉強すべく同大学音楽学部・さらにニューイングランド音楽院に入学した。有名なコンバース博士の薫陶を受け、やがてボストンで新進作曲家として知られる存在になつていた。大学卒業後ポストン交響楽団を指揮し、自作の交響曲第一番・ピアノ協奏曲第一番等を披露。小沢征爾に先駆けること四〇年、同楽団を指揮した初の日本人となつた。ラジオを通じピアノ

に前進し、素晴らしい若者が限りなく多く育つていくと思ひます。(校歌を交響詩と言ひ放つた人がいたのか？詩人の感性のなせる技と思うル本稿は先生の絶筆)

ii 大澤の死と  
音楽界の永い忘却  
校歌作曲から八カ月たった一〇月二八日、作曲・編曲あわせて九〇〇以上を残して大澤は四七歳の若さで急逝した。この後日本の楽壇はすっかり大澤を忘れた。「その業績に対し非礼な程の忘却」については次のように説明される。

①日本人は昔程ではないにしても自国人が西洋クラシックの作曲をすることにやや冷淡である。  
②大澤は日本の音楽学校に行かず帰国後の音楽活動も自らの実力に頼つて独立独行であつたため楽壇での人脈が弱かつた。  
③逝つた昭和二八年が誰も他人に構つていられない慌ただしく余裕のない時分だつたうえ、若すぎる死であつた。  
④譜面として出版された作品が少なかったことも影響した。  
⑤散逸を免れる為に大澤家に保管をしたことがいわば封印された形となり、研究者の目から遠ざかつた。

ノ曲・室内楽曲等の自作品を発表した。  
昭和九年大澤はその音楽的技術をより完璧なものにするためパリへ移り、高名なポール・ドユカスとナディア・ブーランジェに師事。翌年コンセル・パドゥール管弦楽団を指揮し、パリで作曲した交響曲第二番・ピアノ協奏曲第二番を上演し大成功を収めた。そして、華麗な六年間の留学期を締め括り昭和十一年に帰国した。この間大澤の主要作品の多くが作曲された。

iii 帰国直後  
然しながら、意気揚々と帰国した大澤が東京・大阪で幾度か催した作品発表会は十分な評価を得られなかつた。その反省から、より平明さや伝統に配慮して作曲した交響曲第三番とピアノ協奏曲第三番も同様だつた。演奏技術的にも作風的にも当時の日本では受け入れられなかつたのである。(今回の帰国は一時的なものであり)大澤は自分を評価してくれる欧米へ活動の場を移したかつたが戦局の悪化で叶わなかつた。

iv 戦中戦後  
日本の間尺に合った仕事をせざるを得なかつた大澤は音楽発信の場を演奏会からラジオ・映画・宝塚のレビュウなどのための作曲と演奏等に多くのエネルギーを費やすようになった。戦後はNHK・朝日放送で番組を持ち聴衆への啓蒙的役

【第三楽章】  
「時は二二世紀―  
遂に私の時代が来た！」

i 復活ののろし 遺品発掘  
平成一二年夏、藤本賢市(神戸新聞記者)と片山杜秀(日本近代音楽史の読み直しを図つていた音楽評論家)とが神戸の大澤家で多くの手稿譜等の現存を確認した。半世紀にわたり眠り続けていた遺品の発掘は大澤復活ののろしとなつた。片山は平成一五年リリースの「日本作曲家選輯・大澤壽人の企画に参画。このCDは平成一五年年度文化庁芸術祭レコード部門最優秀賞を受けた(余談だが、片山は政治思想史研究者で慶応義塾大学法学部准教授。「時は」はこのCDのキャッチコピー)。

ii 急速に進む再評価  
そして、平成一五年二月日本人作曲家の再評価を目指すオーケストラ・ニッポニカがピアノ協奏曲第三番を蘇演し本格的再評価がスタート。そののちの演奏会やCDリリースにより人々の関心が集まり始めた。この半世紀を超えるときの流れは、時代を先取りした大澤作品に時代が追い付くために必要な熟成の時間だつたと言える。

割を担つていた。映画音楽は溝口健二監督・吉村公三郎監督等の作品で約三〇本に及ぶ(余談だが、大澤のそばで楽譜運搬係をしていた関学の後輩が後の高島忠夫である)。神戸女学院大学で教職にも就いた。昭和二五年前後から社歌・校歌等の作曲依頼も増えて来た。「時代の寵児」と言えるセンサーショナルな活躍ぶりで常に多忙を極めた。そんなある日、神戸女学院大学の研究室へ淡路島から県立高校の先生が校歌作曲の依頼に訪ねて来た。竹中の紹介だつた。(津高新聞によると校歌制定にあつたつて音楽担当の横山国男、生徒会担当の広田楠美両先生が中心になつたと記載されているので、恐らく横山先生が作曲依頼に行かれたものと思われる。)

【第二楽章】  
そして運命の  
昭和二八年  
校歌作曲依頼、  
校歌制定、  
大澤の急逝

i 校歌制定過程  
津高新聞(当時津高新聞と称する時期があつた)によると、昭和二八年一月二九日竹中の歌詞が母校に着く、二月三日に竹中の紹介で大澤へ作曲正式依頼、(大澤の創作ノートに二月一日作曲とのメモ)二月二五日志筑公会堂での卒業式で卒業生・在校生・学校側等校歌斉唱(制定式)と

かも没後半世紀・生誕一世紀の誕生月)に大澤家は生前大澤が教鞭をとつていた神戸女学院大学に段ボール四三個分の遺品を寄贈した。同大学音楽学部は直ちにプロジェクトチームを立ち上げ研究・分析にかかり、目録の作成・コンサートの実施等意欲的に取り組む。同チームによれば「録音プロジェクト」及び「評伝」執筆が進行中であり、数年後には自作自演の貴重な音源資料をもとにCDをリリースし、大澤からの「未来への遺産」にしたいとのことである。なお、目録「煌めきの軌跡」は平成二〇年度音楽クリティック・クラブ特別賞受賞。

現在作成中の大澤のホームページがスタートすれば資料公開の状況を容易に見て取れることと相まって同大学がいわば大澤ワールドの情報発信基地となるものと期待される。  
演奏会は「大澤壽人スベクタクル」と称し分析が進んだ曲から順次蘇演している。平成二四年三月三日の公演「大澤壽人スベクタクルⅢ」はその三回目。会場で大澤の長男壽文氏とお会い出来たのでいい校歌を作つて頂いたお礼を申し上げておきました。

iv 大澤作品を継続的に上演している  
オーケストラ  
神戸女学院大学音楽学部及びオーケストラ・ニッポニカ以外では関西フィルハーモニー管弦楽団が大澤

の記載がある。以下(いい機会なので)同新聞・エンジの青春・六〇年のあゆみの記事により校歌制定までの経緯をやや詳しく追ってみる。(巽靖弘・脇素子両先生に貴重な資料を用意して頂きました)。

①沸き起こる校歌制定運動  
母校が発足して四年経過した昭和二六年になると学習・生徒会・文化・体育等の方面においても急激な発展を遂げて来た。洲高・洲実に負けない学校造りを目指す以上校内的にも、また対外的にもその存在を象徴し表現する校旗・校歌を制定しなくてはならぬ。第二代会長小久保正雄は昭和二七年の選挙立候補に当たり「校旗・校歌制定」を公約として掲げ当選した。

②校旗・校歌作成委員会  
昭和二七年の夏、生徒会・同窓会・育友会・職員から各々代表を二名ずつ出し本委員会をスタートさせた(戦後民主主義の息吹を感じさせる)。生徒会からは小久保会長、水室副会長を送り込んだ。  
③二つの難題  
校旗制定は順調に進んだが校歌は思わぬ難題に直面した。育友会から「自分達の校歌は自分達で作れ」との意見がでたのである。そこで生徒会側は今迄生徒間で作品募集をやつたこともあるが結局要領を得ないで終わっている事、校歌のごとき学校を象徴する大事なものを軽はずみにすべき

v 再評価後の大澤作品の取り上げ状況  
取り上げ状況  
(曲名、再評価後の上演等)

- ・ピアノ三重奏曲 演奏会1回・CD
- ・ピアノ五重奏曲 演奏会1回・CD
- ・ピアノ協奏曲第一番 演奏会1回
- ・交響曲第二番 演奏会3回・CD
- ・ピアノ協奏曲第二番 NHK TV 放映
- ・ピアノ協奏曲第三番 演奏会3回・CD
- ・ピアノ協奏曲第三番 演奏会8回・CD
- ・ヴァイオリン小協奏曲 演奏会1回・CD
- ・交響曲第三番 演奏会1回・CD
- ・NHK B S T V 放映
- ・トランペット協奏曲 演奏会1回・CD
- ・NHK FM 放送
- ・その他多数

【最終楽章】  
オール津名高、  
「誇り」と「感謝」  
みんなて共有

我が校歌は稀代の天才作曲家の作品である。ピアノ協奏曲・交響曲を始め大澤の膨大な作品群はいわば我が校歌の兄弟である。我々は誇りと親しみを持って兄弟作品の演奏される会場へ足を運び、大澤音楽の復活を支える一員となろう。(その第一歩として、インター



パリ時代の大澤壽人(二九歳)

ネット・ユーチューブで「大澤壽人」を検索し、ピアノ協奏曲第三番を聴いてみるよ。

同時に校歌を歌う時、我々は竹中・大澤という素晴らしいコンビを選び、その制定向け情熱を傾けた昭和二七・二八年当時の生徒会並びに先生方に深甚なる感謝の気持ちを持つ。

(今回、田中崇由希先生によりインターネット・ウィキペディアの両氏の作品欄に「兵庫県立津名高等学校校歌」が書き加えられた。小生はこれも校歌制定に関わった人々への思いの表し方のひとつと受けとめる) 完

# わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった？

表明としてこれに感じた(母校は早い時期の依頼である)。我が校歌も含めその作品群には

清純な感情の涵養、考察力や友情の育成などへの願いが込められ、明瞭で、自由奔放に作詞されているという特徴がある。

そして、押しつけがましい教訓や道徳臭、過度に郷土の名所旧跡を自慢すること等を忌避している。というのは、彼が何よりも芸術性が備わった歌いやすい口語詩であることや、明るく気品に満ちていることを校歌の第一義としたからである。紫綬褒章等受章。

参考(引用)文献・・・  
①(煌(きら)めきの軌跡II)  
平成二三年八月刊(九三ページに「津名高等学校校歌 兵庫県立」の記載あり(泪)  
神戸女学院大学・大澤壽人遺作コレクション 詳細目録  
②(いま蘇る音楽大澤壽人―センセーションを呼ぶ作曲家)  
平成二三年度研究助成  
神戸女学院大学音楽学部 大澤資料プロジェクト代表 生島美紀子  
③(阪神間モダニズムが生み出した二人の音楽家：貴志康一と大澤壽人)  
平成二三年三月  
神戸大学 紀要論文 松井真之介  
④(日本作曲家選輯CD二枚  
ピアノ協奏曲第三番・交響曲第三番  
ピアノ協奏曲第二番・交響曲第二番)  
CDについての詳しい解説文  
音楽評論家 片山杜秀 平成一五・一八年

⑤(竹中郁作詞「紀見小学校校歌」試論  
―故辻田豊学兄に捧ぐ―)  
平成一九年三月  
関西学院大学・史紀要論文  
北川 久

⑥(楽譜他コピー)  
平成二四年三月七日神戸女学院大学で得た「楽譜(自筆鉛筆書き・歌詞原稿・創作ノート)」の写し。歌詞原稿には(男子の方にむくように)との大澤の書き込みがある。作曲依頼に伺った先生が「女学校から男女共学への脱皮を目指しているの(男子生徒を意識し) 意気揚々と大きな声で斉唱できる曲を作曲してほしい」趣旨のお願いをしたのを大澤が書きとめたものと思われる。

筆をおくにあたって

わが交響詩を  
いまに遺せし  
もろびとの  
あつきおもひの  
―ありがたきかな

(隅田先生に敬意を  
払い校歌を交響詩と表す)

本起稿の機会を与え、終始上手におだててくれた(笑)お二人にこの詠を捧ぐ。  
母校の先生にして後輩・・・  
浜田厚美さん  
おのころ会の  
仲間にして校医・・・  
高島玲子さん

## 作曲者を中心に 校歌のルーツを求めて

同窓会長 薄 木 昌 信

母校の在學生及び同窓生は、校歌について、作詞者は近代詩人として著名な竹中 郁氏であることは多分御存知のことと思います。が、作曲者である大澤壽人氏は、一体どんな人なのか、そもそも校歌は、どのような経緯でいつ頃制定されたものか、については殆ど御存知ないし、知る機会もなかったと思われまふ。

い。なんなら私から頼んでみる」と請けていただき後日内諾を得たと連絡いただきました。

への参考にとこのたび岡内さんから各種文献・CD・楽譜コピー等寄贈されました。本来校歌関係の資料等が一堂に集められ在學生が自由に閲覧できる事が望ましいと思われまふ。この機会に例えば図書館への校歌コーナー設置(その内容、設置時期等も含め)につき具体的には母校と協議したいと思ひます。これが実現できれば現在図書室にある「同窓生文庫」と相まって在校生・同窓生のシンボルがより充実いたします。百周年に向け積極的に準備を進める先駆けになるものと確信いたします。(我々は、この機会に「大澤壽人」の曲を聴いてみよう。通販でならCDは1,000円程度で買えるようです)

母校は、平成二二年一月一日に、「しづかホール」において、創立九〇周年記念式典を盛大に挙行しましたが、その際にアトラクションとして、日本が世界に誇るNHK交響楽団の堀 正文氏の指揮の下で、N響室内合奏団に、校歌を演奏してもらいました。その美しい見事な演奏に、当日出席していた関係者約八〇〇名の全員が、あのN響が母校の校歌を演奏してくれたことに対し心から感激しました。同窓会事務局では、この記念式典に校医でもある高島玲子さん(二六期生)が、とても感動されていましたので、「同窓会の会報への寄稿に掲載したいので、校歌について是非とも執筆してほしい」旨を申し入れたところ、「私より同期生の岡内君が詳し

そこで、改めて事務局から岡内さんに、原稿執筆の依頼をしましたところ、「前から関心があったので作曲者に焦点をあてつつそのルーツを調べてみましょう」と快く引き受けてくださいました。それが、今回ここに掲載することになった「わが校歌の兄はピアノ協奏曲だった？」と題する寄稿文です。

同窓生の皆さん方におかれましても、この寄稿文をお読みになって、作曲者(作詩者)の素晴らしさと校歌制定のルーツに感動されたことと思ひます。

岡内さんは、この寄稿文を完成するにあたり、津名高新聞を含む各種の文献を調べたり、神戸女学院大学に出向いたり、母校へ来て小川元延先生に当時のいきさつをヒアリングするなど長期間にわたり調査、検証して下さいました。

私は、ここに、同窓会長として、今回の寄稿に改めて敬意を表すると共に、厚くお礼申し上げます。

ところで校歌について勉強してみようとの後輩たち

な。今年、津名高校の卒業式は、平成二四年二月二八日に挙行され、最後に校歌斉唱がありました。が、今回校歌のルーツが判明したことを祝福するかの如く、卒業生一九八名全員が、例年にならぬほど大声で校歌を斉唱していたことを報告し、私のこの紹介文の結びといたします。

岡内さん、ほんとうにありがとうございました。